

奴田原睦明著 岩波書店

『遊牧の文学——イブラヒーム・アル・コーニーの世界』

随所ではつとさせられる文章に出会い、あれこれ思いをめぐらせるよう誘われるのではいかないし、またきっとそうしてはならない本である。奴田原さんは久しく沙漠の遊牧民ベドヴァインに並々ならぬ関心を注ぎ、ほぼ定期的にシリア沙漠のバニー・ハーリド族と生活をともにする経験を重ねながら、私たち定着民の生活習慣、常識的な価値体系と根底的に隔絶、対立し、さらにはそれを暗黙裡に否定する彼らの生活、社会、風俗、自然観、道徳、死生観、美意識に見られる「もう一つの人間存在のあり方」に深く共鳴し学ぼうとされてきた。人間の制御を超えるある現代テクノロジーの急激な発達、また恐れと後悔を知らぬ人間中心主義のために、人間自身が袋小路に追いやられると同時にエコ・システムも破壊され、現在人類そのものが存続の危機に瀕することになった「定着民全般の生き方とその榮光の証である文明」に根本的な「拒否反応」を覚えられたからだという。

そんな奴田原さんが数年まえ、パリのある書店でリビア領内のサハラ沙漠のベドヴァイン、トゥアレグ族出身の作家イブラヒーム・アル・コーニーの短編集『檻』とほとんど運命的な邂逅を遂げられ、以後個人的にもこの作家と親しく対話を続けながら、彼の希有で特異な小説世界の研究に没頭してこられた。そして3年まえに短編集『ティブル』を翻訳刊行され、わが国に初めてコーニー文学の魅力と特質の一端を紹介されたのだが、このたびこのコーニーの作品を一おそらく世界で初めて—全体的かつ体系的に論ずることで、私たちヤワな定着民の想像をはるかに絶する「もう一つの人間存在のあり方」を力強く感動的に提示された。私が250頁足らずのこの書物を読むのに何日も費やさねばならなかつたのも、厳しい自然と闘いながら誇り高く毅然と生きている遊牧民の世界の迫力と美に圧倒され、自分もそのひとりにほかならない定着民の「文明」に「拒否反応」とまでは言えないにしろ、少なくともかなり深刻な疑惑を覚えて何度もふうっと嘆息し、そのたびに気を取り直して読み続けねばならなかつたからだ。

本書はコーニーの小説世界を私たちにも

わかるかたちで抽出、説明することで「遊牧の民」ベドヴァインという「もう一つの人間存在のあり方」を記述する。苛烈で峻厳な沙漠の風土、博物誌、遊牧民固有の生活慣行、沙漠人の精神的傾向、靈的事象、哲理・格言・伝説、劇的シチュエーションなど、コーニーの豊穣で味わい深いテキストに則してきわめて具体的に解説され、それに逐一説得力のある個性的な考察がくわえられている。たんなる形容、比喩ではなく、実際に生きられた本物のノマード文学という未知の世界の発見に驚嘆しながら読み進めていくうちに、私たちは「歴史」と呼ばれるものを形成してきた定着民の文明の甘さと傲慢、脆弱さと身勝手、醜さと恥をひしひしと感じざるをえず、改めて人類の未来を暗澹たる気分で眺めざるをえなくなつてくる。だから、たとえば本書の「エピローグ」の「沙漠考」と題された場所のこんな考察に出会うと、思わず我を忘れ、膝を叩きたくなるのである。

「何もない沙漠は自分が真に何物にも所有されていないか、どうか確かめうる場でもある。そして自分が何にも所有されていないことが確かめられた者はその時

精神の豊穣を約束されている。その者にとつてもはや沙漠は重苦しく单调な沈黙の世界ではなく、思索の眩く賑わう場となつてゐる。その時沙漠は内的自然と化している。沙漠は孤独の地もある。沙漠の孤独は林泉の孤独とは異なる。それを耐え抜くには、精神の強度が求められる。沙漠の孤独を語るにふさわしい存在は自分の巣穴に籠もり続ける蜥蜴かもしれない。生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独を蜥蜴は言葉ではなく、行為で語つてゐる

沙漠という絶対的 (absolute)な自然にあつて人間はなんら特權的な存在ではなく、ここで語られる蜥蜴と同じように、ただ「忍耐を梃子とした生命の燃焼」をする衆生の一つにすぎないことを奴田原さんは繰り返し説き、それこそが「真正なものauthenticity」と謂うべきなのだといふ。そして、いう問い合わせる。

「savage (野生の)」という言葉は沙漠に帰属する言葉だ。沙漠に生きるもの全てに帰属する言葉だ。そこには自然の中に生きるものたちの本然の性があるのではないか? 野生の中に生の尊嚴を見ることができるのではないか? 人間の心の源というものがこの野生の中に見つけられるのではないか

ろうか? 野生を否定し、野生の外に見出そうとする倫理的規律はいつか行き詰まる運命にあるのではなかろうか? 動物は野生の中に生の本来のものがあり、これは全ての衆生に通じると教えてはいるのではなかろうか? 言葉ではなく行いで語る生類たちの高貴さは野生の中に見出せないだろうか?

だが、と奴田原さんはまるで独り言でも呟くように、悲しげにつけくわえている。コニーの作品が舞台としているサハラ沙漠の、そんにも野生で高貴で真正なトウアレグ族は現在、飢餓に襲われて難民と化し、分断・抑圧されて危機的な状態にある。いや今日では、ひとりトウアレグ族のみならず、ベドヴァイン全体が瀕死の床にあるといつても過言でない。とすれば、長い歴史と伝統を持った一つの人間の生き方がやがて消滅してしまうことになるのではないか、と。

コニーは1948年生まれ、現在イスラエル大使館の文化参事官として勤務している作家だが、奴田原さんが「あとがき」で列挙している作品リストを一瞥するとすぐ、驚くべきことがわかる。それは彼の全27作品のうちじつに24作までが9

0年代に発表されていることである。年に4冊、5冊という信じがたい創作力を發揮している年もある。これは何を意味するのか? むろん、コニー自身がベドヴァインという「もう一つの人間存在のあり方」の消滅を間近に予感し、自分がいかなる系譜に帰属し、何を表現すべく運命づけられた作家であるかを改めて自覚しつつ、必死にみずからに使命を果たそくとしていること以外に考えられない。では、コニーとはいかなる系譜に帰属し、何を表現すべく運命づけられた作家なのか? 最後にもう一度、奴田原さんの渾身の文章を引いておこう。

「イブラヒーム・アル・コニーは沙漠に帰属する作家である。沙漠という特異な風土とそこに生きる人、否そこで生死を敢行する全ての衆生にとつてコニーは等しく彼らの表現者たりえている。この表現者の系譜は始源にまで遡る。紙などというものが無い時に、後世へのメッセージを岩に刻んだ古代の表現者の系譜に彼は帰属する。そこで岩に刻まれたものは、われわれが考えるような彼らの芸術的欲求の産物としてではなく、そこに見られる芸術的価値はあくまで結果

の一つであつた。彼らが堅い岩に組み付いてまで描こうとしたものは、トゥアレグの先祖が後世へ伝えなければならなかつた存続のための教訓であつたはずだ。先祖が困難な生を嘗んだ末に学びとつた、存続のために過たずには選びとられなければならない指針を後世に必死に伝えようとしたのではなかつたか。コーニーの作品世界は読者にそのことを先ず告げ、さらに彼がこのような表現者の系譜に繋がる作家であることを思わせずにはおかないのである」

むろん奴田原さんはここで、ただベドヴァインの存続のことだけではなく、—いやもつと正確に言わねばならない—、ベドヴァインの存続の願いと同時に、人類の存続の条件をも語つてゐるのである。私はこの本を読んで深い感動を覚えた。そして、恐怖の念を抱いた。

(西永良成)

